

視覚・聴覚障害対応を考える：奈良さんの話を聞きながら

古瀬 敏（静岡文化芸術大学名誉教授）

ほぼ先天的に視覚・聴覚障害を持っている人と、子どもとしてある程度ことをあやつるすべを身につけた後に障害者になった人とでは、どうやって世の中をわたっていくかに違いがあるように思われる。

先天の聴覚障害、つまり大文字で DEAF という表記を主張できる人だと、ある意味で自然発生的な手話が第一言語とならざるを得ない。たとえ日本に生まれても日本語は母語ではなくてあとから習得する第二言語になる。しかし、子どものころに日本語を第一言語として身につけた人は、聴くことは困難でもしゃべるほうはある意味で不自由なしに行えるようだ。

視覚障害の場合も、先天あるいは文字を習う前に目が悪くなってしまうと、読み取るためには点字を主たる手段として使うことになる。ただ実際には病気などで目が悪くなることのほうが多いようで、弱視の状態である期間が長い人は、徐々に衰えていく視力をどう用いていくのか、悩ましいことだと思える。

盲ろう状態である福島智さんは、リアルタイムでは指點字による通訳、デジタル情報がある場合は点字ディスプレイで読み取っているわけだが、奈良さんは視覚が次第に衰えていく過程で、加えて聴覚障害があることが判明したということだが、今後情報の入手をどのようにしていくか難しそうだ。現状ではまだ視力では 0.01 程度でかろうじて読めるとか。私は極度の近視、裸眼では 0.03 程度で焦点が合うのは眼から 10 センチくらいのところなので、眼鏡無しでは見知ったところでないと動けず、温泉にも眼鏡を持って行かないと入れない（個人的には温泉嫌いなので、好んで行くわけではないからトラブルはあまりないのだが）。

視覚・聴覚障害がある場合に、特別支援学校に行くかそれとも普通学校に行って通級するか、という点について。国連障害者権利条約では、ろう学校の重要性について言及していると記憶している。それは上述した DEAF の件、ろう文化、つまり第一言語としての手話の主張を受け入れているからだ。視覚障害については、暮らしていく上でのテクニックを身につけることが追加して必要なのかと考えると、聴覚障害よりは強い主張が伴っていないのかもしれないと思う。

昨今の音声認識技術の進展の速さをみていると、今後どうなるのか、まったく先が読めない。これは翻訳技術にも共通することだが一数日前、自分で書いた文章を Google 翻訳で英語に直してみたら、あっという間にできあがってきた。たぶん並みの学生に翻訳させるよりずっとよくできていると思う。